

# SSSB News Letter

No. 20

Feb. 2000

種生物学会総会報告

庶務報告および会計報告 ..... 2

## 会費納入をお願いします

会計監事 西野貴子 ..... 5

第31種生物学会シンポジウム報告

ポスター発表リスト ..... 6

種生物学シンポジウム参加・印象記

1日目・藤本文弘 ..... 7

2日目・西田佐知子 ..... 8

遺伝子と環境の世紀に向けて

学会会長 矢原徹一 ..... 10

編集委員会報告 ..... 10

英文誌編集委員長 河野昭一

和文誌編集委員長 川窪伸光

## 名簿更新にご協力を

会計監事 西野貴子 ..... 11

種生物学会ニュースレター  
種生物学会和文誌編集委員会編集  
The Society for the Study of Species Biology

# 種生物学会 総会報告

1999年12月18日  
第31回種生物学シンポジウム会場  
関西地区大学セミナーハウス

## 1. 庶務報告

矢原会長から以下の項目について報告があり、了承された。

- 1) 4月2-4日に種生物学国際シンポジウムを開催した。参加者は119名（うち学生49名）で、盛会であった。
- 2) 発行が遅れていたPSB13巻2-3号を出版した。また、Blackwell社業務委託後の最初の巻となる14巻1-3号を出版した。
- 3) 文一総合出版に業務委託した単行本スタイルの種生物学研究22号を出版した。
- 4) ニュースレター18、19号を出版した。
- 5) 日本学術会議学術団体登録の継続申請を行い認められた。
- 6) 渡辺邦秋氏（神戸大学）が作成中のキク科染色体数データベースに関する科研費補助金を日本学術振興会に申請した。
- 7) 日本生態学会などと連名で、科研費学術調査に関する要望を行ない、要望の内容がほぼ認められた。

## 2. 審議事項報告

西野会計幹事から、決算の詳細な報告があり承認された。また、来年度予算については、決算の詳細な検討と、学会の新方針（英文誌出版委託と、和文誌の出版形態の変化）について、

矢原会長と西野会計幹事からの説明があり、学会運営の今後の見通しが議論され、会費値上げについても、審議され、その後、承認された。

### 1) 1999年度決算（西野会計幹事）（資料1）

1999年12月10日、岡崎純子、藤井伸二会計監査委員に収支決算報告書、内訳明細、通帳類、伝票などを照合、監査していただき、その後、1999年度決算は総会にて承認された。

#### ・収入の部

会費徴収について、98年度までの滞納分は7割の徴収目標にはやや及ばなかったが、98、99年度、さらに2000年度の会費納入状況が良好であったため、総額としてはほぼ目標に近い数字となった。

別刷代が例年に比べ大幅に減少したが、これはPSB vol. 13 (2-3)分のみ収入であり、PSB vol. 14からの別刷代は出版業務委託に伴い別刷代収入には直接的に該当しなくなったためである。

この他の項目についてはほぼ例年どおりであった。

#### ・支出の部

決算を行った12月7日段階で未払いのものがあり、決算書上では繰越金が存在するが、支払い予定額を試算すると7ケタ近くの赤字に及ぶ可能性が高い。

英文誌編集業務補助謝金は、英文誌編集委員会の並々ならぬ努力で支出額を抑えることができたが、残念ながら他の項目では経費削減の成果は表れなかった。

### 2) 2000年度予算（西野会計幹事）（資料2）

#### ・収入の部

会費収入は1999年度予算と同様、98年度分までの滞納総額の70%徴収、前年度と当年度会費は完納していただくのを目標とし試算を行った（註1）。また2000年度よりブラックウェル社からの還付金が収入項目に加わることになり、別刷代や購読料等の約8%が見込まれている。

資料 1



## 1999年度 種生物学会収支決算報告書 (1998.12.17-1999.12.7)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
会費	3,992,248	印刷費	1,124,758
購読料	199,320		1,080
バックナンバー	33,360	PSB Vol.13(2-3) *	1,058,111
別刷り	398,380	Newsletter No.18	31,500
預金利子	1,365	Newsletter No.19	34,067
寄付	0	出版委託費	
著作権配当金	64,728	英文誌出版費	0
		和文誌出版費 *	0
		発送費	382,850
		会誌発送 PSB Vol.13(2-3) *	120,000
		会誌発送 Newsletter No.18	71,200
		会誌発送 Newsletter No.19	41,130
		会誌発送 種生物学研究 22 *	149,260
		バックナンバー	1,260
		事務費	302,797
		和文誌編集・発送	26,145
		英文誌編集	169,322
		その他	107,330
		英文誌編集事務補助謝金	143,840
		英文校閲	67,500
		雑費	100,000
		自然史学会連合分担金	0
		98年度会計監査交通費	0
		98年12月シンポ準備金	100,000
小計	4,689,401	小計	2,121,745
前年度繰越金	2,184,796	次年度繰越金	4,752,452
合計	6,874,197	合計	6,874,197

\* : 1998年度分に相当

## 資料 2



## 2000年度 種生物学会予算

収 入		支 出	
会費	4,980,300 註1	印刷費	65,000
(00年分) 一般	3,190,000	Newsletter印刷費	65,000
(00年分) 学生	275,000	出版委託費	9,744,000
(滞納分) 一般	1,353,800	1999年英文誌出版費	4,122,000 PSB14巻, 既刊
(滞納分) 学生	161,500	2000年英文誌出版費	4,122,000 PSB15巻, 未刊
購読料	150,000	1998年和文誌出版費	500,000 22号, 既刊
バックナンバー	50,000	1999年和文誌出版費	500,000 23号, 未刊
預金利子	1,500	2000年和文誌出版費	500,000 24号, 未刊
学術協会著作権	65,000	発送費	383,000
Blackwell社からの還付金	0 註2	Newsletter郵送費	80,000 NL20, 21
片岡基金利息分繰入	1,111,103	1999年和文誌郵送費	150,000
片岡基金取崩繰入	150,000	2000年和文誌郵送費	150,000
		バックナンバー郵送費	3,000
		事務費	285,000
		和文誌編集・発送	25,000 封筒代
		英文誌編集	160,000
		その他	100,000
		英文誌編集事務補助	384,000 註3
		シンポジウム補助金	100,000 1999年度12月
		自然史学会連合分担金	40,000 99, 00年
		会計監査交通費	2,880 99年度監査
		選挙関連経費	223,000
		名簿等印刷費	140,000
		発送費	80,000
		その他	3,000 交通費等含む
		名簿作成補助謝金	30,000
小計	6,507,903	小計	11,256,880
前年度繰越金	4,752,452	次年度繰越金	3,475
合計	11,260,355	合計	11,260,355

註1:前年度会費滞納者は100%の納入率,多年度会費滞納者(1998年度から滞納)からは70%の回収率をめざす。註2:概算額。別刷代やBlackwell社側新規契約の購読料などの約8%が見込まれる。註3:¥6,000/1回(6時間)+約¥2,000の交通費,週1回で年間48回。

しかし初年度ということで僅少であるとのことから、額面は計上していない。

英文誌編集委託の決議の際、委託により赤字が出た場合には片岡基金からの繰入れが方針としてだされ承認いただいたことにより、本年度の収入不足分について先に基金利息分から、さらに不足が解消できない場合には基金本体を取り崩して不足額を補う予定である。

#### ・支出の部

出版委託が増大しているのは、99年度未払い、未発刊分が含まれているためである。

ただしシンポジウム補助金はシンポ開催が年

度をまたいでずれることがあるため、慣例にしたがって前年度開催分のみ計上されている。

また当年は選挙があるため、選挙関連経費が組み入れてある。

このほか、ブラックウェル社から依頼のあった英文表記の会員名簿、また選挙名簿作成のため、会員情報の大幅改訂を行うにあたり、改訂作業の補助に対しての謝金が計上された。

-----  
学会会計の窮状を御理解いただき、総会にて予算案を御承認いただきましたことに深謝申し上げます。  
-----

## 会費納入のお願い

会計報告にもありましたように本学会の財政状況は逼迫しております。学会収入は会員皆さまの会費によって支えられており、健全な学会財政を築くためにも、会費を滞りなく納入してくださいよう御協力をお願い致します。

種生物学会では年会費を前納制でお願いしており、2000年度の会費は一般会員10,000円、学生会員5,000円（初年度のみ3,000円）です。

会費納入状況は、ニューズレターの封筒の宛名ラベル右下に完納年度を数字で示してあります。（例）「-00」とあれば、2000年度分まで完納です。（例）「-99」とあれば、1999年度まで納入されていますので、2000年度分を

（例）「-97」とあれば、1998、1999、2000年の3年分をお支払いください。

ただし1999年度分までは年会費は8,000円です。よって「-97」とある場合には、26,000円（8,000+8,000+10,000）をお願い致します。

このほかにプラス記号「+」と数字が組合わされている場合があります、これは表示されている完納年度に余剰があることを示してあります。

（例）「-99 + 3000」とあれば、1999年度まで完納ですが、2000年度は3000円しか納入されていません。よって不足分の7000円をお支払いください。会費納入状況をお確かめのうえ、右上記の口座に不足金額を納入ください（念のためラベルに不足年度、もしくは不足額を赤字で記入してあります）。

郵便振替番号：01030-3-21704

口座名義：種生物学会

（ご注意）※ラベル記載は、2000年2月10日までの入金分に基づいています。入れ違いにお振込みいただいた場合には御容赦ください。※通常、郵便振替時の受領証は正式な領収証として認められます。できるだけ領収書発行の別個依頼は御遠慮いただければ助かります。※発送作業の都合で完納されている方にも振込用紙が同封されていますが、「-00」とあればお振込みの必要はありません。お許してください。※Plant Species Biologyの発送の際も同様にラベルに会費納入状況が表示されていますが、その状況はだいたい1ヶ月前時点のもので、これはラベル作製と発送のあいだにタイムラグがあり、発送過程上やむを得ないものです。御了承ください。

御不明な点などございましたら、お手数ですが会計幹事まで御連絡ください。

電子メール：nishino@el.cias.osakafu-u.ac.jp,

ファックス：0722-54-9932,

郵便：〒599-8531 堺市学園町1-1

大阪府立大学総合科学部 西野貴子

## 第31回種生物学シンポジウム報告

開催期間：12月17日（金） - 19日（日）

場所：関西地区大学セミナーハウス（神戸市）

第31回種生物学シンポジウムは、兵庫県立人と自然の博物館の鈴木武さんのお世話で、関西地区大学セミナーハウスで開催されました。参加者の事前登録は134名におよび、開催地の地理条件と両シンポの内容が、多数の参加を呼んだようです。特に、2日目のシンポジウム「生物種保全の評価基準を探る」は、人と自然の博物館の呼びかけもあり、さらに多数の当日参加があり大変盛況でした。

いずれのシンポジウムも、活発な議論が展開されましたが、種生物「夜の部」も大変盛り上がりしました。今回、久しぶりに復活した合宿型は、多様な情報交換や、深い議論の機会を提供したようです。

以下に、ポスター発表のリストと、藤本文弘（岐阜大学）さんと西田佐知子（人と自然の博物館）さんに寄稿いただいたシンポ印象記を掲載します。今回は参加されなかった方も、次回はぜひご参加ください。次回シンポジウムは都立大学の可知さんのお世話になる予定です。

### ポスターセッションの記録

- P1 栽培方法が異なる畑地におけるメヒシバ個体群の季節消長と畑内の位置による差異  
小林浩幸・中村好男・渡邊好昭（東北農試・畑地利用）
- P2 テリハハマボウの花外蜜腺をめぐるアリ類多種の資源利用  
中島加奈子・川窪伸光（岐阜大・農・多様性生物学）
- P3 樹形の基礎調査  
八田洋章（国立科博・筑波実験植物園）
- P4 林床に生育するコウヤボウキ連4種（コウヤボウキ・カシワバハグマ・オヤリハグマ・オクモミジハグマ）の個体群動態  
河原崎里子（筑波大・理・生態）・安部良子（山梨県環境科学研究所）・堀良通（茨城大学・理・生態）
- P5 林床植物オオバナエンレイソウ個体群の繁殖に及ぼす森林分断化の影響  
富松裕・大原雅（東大・総合文化・広域システム）
- P6 分子系統学的手法を用いたアブラナ科植物の解析  
大島正稔・渡辺正夫・高畑義人（岩手大・農・植物育種）
- P7 琵琶湖産 *Potamogeton anguillanus*（オオササエビモ）の雑種起源  
飯田聡子（神戸大・自然科学）
- P8 小笠原諸島のウドノキの遺伝的多様性  
河原孝行（森林総研北海道）・吉丸博志（森林総研）・金指あや子（森林総研）
- P9 三田市のオグラコウホネ  
藤井俊夫（兵庫県立人と自然博・生物資源）・麻生泉（都市緑地研究所）

寄稿

第31回種生物学シンポジウムの印象記

## シンポジウム「植物の発生と進化」に参加して 藤本文弘（岐阜大学）

シンポジウム「植物の発生と進化」

オルガナイザー：長谷部光泰（基礎生物学研究所）

- ・光周性と概日時計 井澤毅・島本功（奈良先端科学技術大学院大学・バイオサイエンス研究科）
- ・生活史適応の分子遺伝学的基盤 - 花成時期の遺伝学的制御 - 荒木崇（京都大学・院・理・植物）
- ・花序形態形成のしくみ 後藤弘爾（京都大学・化学研究所）
- ・遺伝子からみた花の相称性の進化 福田達哉（東北大・理・生物）
- ・葉の形を決めるメカニズム Gyung-Tae Kim, 塚谷裕一（基礎生物学研究所）
- ・トランスポゾンと進化 仁田坂英二（九州大・理・生物）
- ・緑色植物の生殖器官、栄養器官の大進化 長谷部光泰（基礎生物学研究所）

種生物学会のシンポジウムに参加するのは2回目であるが、学会から案内をもらったとき、参加してみようという気になったのはそのテーマである。私は研究機関で植物と長いつきあいしてきたが、いまも最も大きなブラックボックスになっているのが発生という現象であり、最近それに関する勉強を少しづつ始めたのが参加理由である。しかし印象を書くことは予想外だったので、私の理解した範囲内での内容紹介と感想を述べたい。

7つの講演を聴くことができた。最初の2つは花成の時期（生殖生長への転換）に関する分子レベルからの研究であった。開花（又は出穂）の時期は遺伝性が高く、その制御の機構はイネなどでよく分かっていると思いがちだが、意外にもこれが分かっていないので関心があり、注目して聞いた。伊澤氏の報告は、出穂が極早いイネの突然変異体を用いて計時機構との関係で追求したものであった。イネはもともと短日性であるが、SE5という突然変異体は光周反応性を失っており、DNAシークエンスの野生型との違いも示された。しかし、期待した計時機構との関係は明らかにならなかった。荒木氏はシロイヌナズナで花成形成の遺伝的枠組みについて4つの経路について述べたあと、FRIとFLCという遺伝子座についての実験について考察し、FRI座とFLC座の制御関係がかなり明らかになってきたことが示された。イネのQTL解析によるいくつかの遺伝子座についてシロイヌナズナの花成時期遺伝子との対応への期待も述べられたが、まだその解析と実証は実現し

ていない。

イネとシロイヌナズナは最も研究が進んだ材料であるが、これらにおける花成時期という遺伝的制御が最も把握しやすいと見られる形質においても、研究が進むとともにその複雑性——つまり従来の予想を超えるメカニズムが遺伝制御にはありそうだということ——が大きいことを、これらの二人のお話を聞いて私は感じた。

次の3題は、有限花序対無限花序、相称性対放射射性という花の形態、そして葉の形態といういずれも植物形態に基本的な問題であった。しかし、その発現には多数の遺伝子が関係し、遺伝子レベルのメカニズム解明は未だ十分ではないが、相同の遺伝子でも発現パターンの違いが種に特徴的な形態をもたらすことがあるということに興味深く聞いた。

仁田坂氏による「トランスポゾンと進化」は、アサガオのいろんなタイプが見られておもしろかった。日本では誰も知っているアサガオの変異が、トランスポゾンの研究に活かされているというのうれしいことである。最近の研究成果も紹介されて興味深かったが、最初のトランスポゾンが発見されたトウモロコシの研究では、現在どういう位置づけになっているのか、高等植物の進化において果たす役割は、塩基複製ミス of 突然変異とどう違うのかについて、もう少し詳しい説明がほしかったようにも思う。

最後の長谷部氏による「緑色植物の生殖器官、栄養器官の大進化」は、このシンポジウムの締め

くくりとしてふさわしい講演だったと思う。シダ類から被子植物までの大進化、とくに生殖器官の分化に大きな役割を果たしてきたと見られるMADS-box 遺伝子族について、被子植物の機能遺伝子オースログが裸子植物、シダ植物で見つかる、そしてこれらMADS遺伝子数の増加と機能分化が形態進化に結びつく。すなわちMADS-boxという遺伝子族の研究が進むことにより、形態形成の進化メカニズム解明が始まったことを述べられた。同時にこの大進化については未知のこのほうがまだ多いことも付け加えられた。

これらの講演を通してまとめの感想としては、植物における発生メカニズムの研究は、分子生物学的研究の進歩にも拘わらず、なおブラックボックスが大きいということである。それと関係するが今回のシンポジウムでは総合討議の時間がなかったのは残念だった。というのは種生物学的な問題として、植物の発生・発育の研究が遺伝学と同じような手法だけでいいのだろうか、という疑問が私に残ったからである。これまでの遺伝学

は、どちらかという環境変動に左右されにくい形質を中心に進められてきた。私は長年植物育種にたずさわってきたが、植物の新環境における成否は、環境反応性に依存するところが大きい。これまでの遺伝学のように突然変異体と野生型を比較するだけで、発育における環境反応性のブラックボックスは明らかになるだろうか。このあたりの問題は、進化を環境変化との関係で追求するとき重要になると考えられるので、今後の論議が必要と思う。

研究の進展により生物の複雑さ、未知の大きさを知らされることは多い。今回のシンポジウムでも私はそれを感じたが、それは同時に生物理解への探求心を刺激することになるのがうれしい。今回のシンポジウムを企画・実行して下さった方々に最後に感謝したい。

## 「生物種保全の評価基準を探る」を聞いて 西田佐知子（兵庫県立人と自然の博物館）

### シンポジウム2 「生物種保全の評価基準を探る」

オルガナイザー：鈴木武・藤井伸二（兵庫県立人と自然の博物館・大阪市立自然史博物館）

- ・絶滅リスクの評価手法と考え方 松田裕之（東京大学・海洋研・資源解析）
- ・環境庁植物レッドリストとリスク評価 矢原徹一（九州大・理・生物）
- ・生活域の植物の保全手法としての復元—アサザプロジェクトを例に 鷲谷いづみ（筑波大・生物科学系）
- ・日本産稀少野生植物の遺伝的多様性 牧雅之（東北大・理・生物）
- ・数理モデルとリスク評価 —カワラノギクを例に— 石濱史子（東京大・総合文化・広域システム）
- ・照葉樹林の植物地理と保全 服部保（姫路工業大学自然・環境科学研究所/県立人と自然の博物館）

白状しますと、種生物学会シンポジウムに出席したのは初めてです。おこなまけものである私の初めの参加動機は「職場の近くで開催される」ということでした。す、すみません…。しかし、出席してよかったと思っています。シンポジウムの規模も出席者全員の顔が見渡せる程度で、家庭的な雰囲気でした。合宿形式も、初対面の人と長く・深く話ができるきっかけを作ってくれるものでした。もちろん、シンポジウムのテーマも大変魅力

的なものでした。動機はともかく、とても充実した週末を過ごさせて頂きました。シンポジウムの感想を聞かせて、ということでしたので、ここでは2日目の「生物種保全の評価基準を探る」に対する感想を書かせていただこうと思います。

このシンポジウムは、社会的にも大きな関心を集めている「生物の保全」という問題に研究者としてどのような関わり方が可能なのか、ということ喚起するものでした。松田裕之さんと矢原徹



一さんは、レッドリストの作成におけるリスク評価がどのように決まるのかを報告されました。鷺谷いづみさんは保全の研究がどのように実社会と結びつくのか例を示されました。牧雅之さん、石濱史子さん、服部保さんは、保全の対象となっている植物を使った具体的な研究例を示されましたが、それぞれ遺伝子・シミュレーションモデル・生物地理という全く違った手法を用いたものでした。保全という名の下、別々のアプローチをなさっている研究者を一同に集めることで、全体としてはバランスのよいシンポジウムとなっていたと思います。一般の方から多数の受講希望があったというのもうなずけます。個々の講演それぞれに感想を書くスペースは無いので、特に印象に残ったものを取り上げますと…。どの講演も大変興味深かったのですが、個人的に特に興味を惹いたのは鷺谷さん・牧さんの講演でしょうか。

鷺谷さんの講演は、保全生態学という学問と保全運動のつながり方、という個人的に興味のあったテーマでした。保全運動は、「この生物は絶滅の危機に瀕しているから守らねばならない」と頭で納得するだけで突き動いていくもののように思われません。その生物や環境に対する愛着とでもいうような、理屈ではないものが原動力になるでしょう。この時、生物学者は何ができるか。一つには、感情だけで左右されやすい運動に冷静な助言を与えるというやり方があるでしょう。しかし、もう一つのやり方として、その生物・環境に、研究者だからわかる面白い情報を付加し、その対象を一層愛着あるものにするとか、その対象ならではのユニークな運動法方を提案することができるのではないかと思います。鷺谷さんが霞ヶ浦の住民と進められているアサザプロジェクトは、まさに後者としての生物学の貢献を鮮やかに見せてくれました。

牧さんは、絶滅危惧植物数種を対象に、その遺伝的多様性を調べた研究を紹介されました。研究の結果は、集団が大きいからといって遺伝的多様性が必ずしも高い訳ではない、というものでした。今まで、「なぜ保全を？」と問われたとき常套句のように使われていた「遺伝的多様性を残すため」という答えに再考を促す、重要な報告だと思いました。もちろん、ここに紹介された結果がその植物の多様性なのか特定の遺伝子の多様性なのか、など、まだ簡単に解決のつかない問題も多々

抱えておられるでしょうが、牧さんの報告は保全生物学が確実に成熟を深めているという印象を与えてくれました。

もちろん、ほかの講演も大変興味深いもので、松田さん、矢原さんや石濱さんの講演には保全に果たすシミュレーションの重要性を実感させられましたし、服部さんの講演には分布や植生という地道なデータの説得力を改めて納得させられました。企画された方たち・講演された方たちに大変感謝しています。

などと誉めてばかりきましたが、不満な点を強いて探すと…。あ、ありました。今回のシンポジウムは一般の方達の参加を呼びかけた、ユニークなものでした。しかし、せっかくのこの試みがあまり生きていたとは思えません。特に、講演において研究者以外の方にも理解しやすいような心配りがどれだけなされたかが気になります。講演の内容を変える必要はないと思います。特に今回の話の筋は、研究者であるなしにかかわらず面白いものは面白いし理解できるものは理解できるものだったでしょう。しかし、用語に対する配慮は必要だと思います。用語は研究で常に耳にしている者と初めて聞く者で理解度に大きな差があるでしょう。「メタ個体群」とか「自家交配」などの用語は、初出の際にひとこと解説を行うなどの配慮が欲しかったと思います。「評価のレンジ」とか「サイズバリエーション」とか、ついつい英語を使ってしまうのも、もっと意識的に避けて欲しかったと思います。

今回このシンポジウムに参加させていただき、なんと贅沢な勉強会に寄せさせてもらったのだろう、というのが最終的な感想です。セミナーハウスに籠もって、夜通し飲んで議論して、昼には興味ある分野の最新情報を聞かせてもらう…。大変家庭的で贅沢な勉強会。これからも、面白いシンポジウム企画を期待しています。少し遠くてもちゃんと参加しますから…。



# 遺伝子と環境の 世紀に向けて

種生物学会会長・矢原徹一

目前に迫った21世紀は、「遺伝子の世紀」であるとも、また「環境の世紀」であるとも言われている。第31回種生物学シンポジウムは、この2大テーマをとりあげたものだった。

遺伝子レベルの研究の進歩は、「発生と進化」という古典的なテーマに新しい光を投げかけ始めた。その結果として、EvolutionとDevelopmentという2分野を統合した、EvoDevoと呼ばれる新しい学際領域が大きく展開しはじめた。今回のシンポジウム参加者は、きっと新しい学問の息吹きを感じられたことと思う。しかしまだ、「環境への適応」という問題と「発生」という問題の間の溝は埋められていない。この2つをつなげることが、今後の課題だろう。

野生植物の絶滅と保全というテーマは、近年大きな社会的関心を集めるようになった。マスコミがまったくとりあげなかった10年前を思うと、変化の早さに驚かされる。種生物学会では、このテーマに関する研究に携わっている会員を多数擁している。にもかかわらず、このテーマが種生物学シンポジウムでとりあげられなかったのは、「科学研究」と「社会活動」が区別されていたからではないだろうか。「保全生物学」の新展開は、この垣根を崩しつつある。もちろん、「科学研究」は徹底して客観性を追求すべきものだが、保全上必要とされる課題には、完全な検証を待ってはられないという緊急性がある。ここに、「リスク評価」などの新しい考え方が必要とされる理由がある。今回のシンポジウムの内容は、単行本スタイルの「和文誌」にまとめられるので、これを契機にさらに研究が発展することを願いたい。

21世紀まで10ヶ月を切った。次回のシンポジウムは、東京で2月9-11日に開催の予定である。どんなテーマで、どんな議論ができるだろうか。種生物学をどう発展させるかを考える好機として、会員全体で真剣に考えたいものである。

# 編集委員会報告

Plant Species Biology  
英文誌編集委員長  
河野昭一

英文誌 Plant Species Biology, Volume 15, no. 1の刊行は、2000年4月発行予定で、スケジュールどおり進行しています。

Blackwell-Asiaの方には、1999年12月に原稿7編が発送済みとなっており、現在、Blackwell社編集担当の方で印刷のための処理が進行しています。内容は、1999年4月2-4日に開催された国際シンポジウム(International Symposium: Plant Population Biology and Evolution: New Perspectives toward a New Century)講演論文のうち3編、一般投稿論文4編(受理後、査読を経て掲載可と判定された論文の先着順)の合計7編が掲載されます。

次号、Volume 15, no. 2の入稿は、2000年3月末を予定していますが、引き続き国際シンポジウム特集論文と一般投稿論文とを、掲載すべく現在編集作業をつづけています。会員の皆様へのお願いは、次々と魅力的な論文を掲載いたしたく思いますので、これまで以上にふるってご投稿をお願いいたします。

# 種生物学研究

和文誌編集委員長  
川窪伸光

和文誌の単行本化の第一弾、「花生態学の最前線・美しさの進化的背景」を、昨年12月に、やっとお届けできました。内容について、学会員の方々のご意見は様々でしたが、おおむね好評です。しかし、学会初の企画ゆえに、いくつかの問題点も明らかになり、今後の編集発行では改善していくつもりであります。

送られてきた和文誌を、封筒から出すときにインパクトがあったと好評の「表紙」の作者は、京都在住デザイナーの村上美咲さんです。表紙

デザイナーさんの名前が何処にも記載されていなくて大変失礼しました。重版時には、記載すると共に、次号からは、編集に関わった方々の名前がきちんと記載されるようにいたします。

さて、次号の「森の分子生態学・遺伝子が語る森林のすがた」の編集は、編集委員の西脇亜也（宮崎大学）さんに、責任編集者をお願いして進めています。確実に編集作業は進行しており、秋ごろに発刊できる予定です。

また、次号の和文誌は、第31回シンポジウム2日目の「生物種保全の評価基準を探る」の内容をもとに以下のように企画しました。矢原徹一さんに責任編集を依頼し、すでに著者陣には執筆依頼しました。この刊の発行は年末を予定しています。

### 保全と復元の生物学 野生植物を守る科学的思考

はじめに：野生植物研究者が肌で感じる絶滅の危機・鷺谷いづみ（筑波大学・生物科学系）

第1章 環境庁植物レッドリストとリスク評価・矢原徹一（九州大学・理・生物）

・・・解説Box：地方版レッド・データ・ブックの現状／成果と問題点・藤井伸二（大阪市立自然史博物館）

第2章 絶滅リスクの評価手法と考え方・松田裕之（東京大学・海洋研・資源解析）

第3章 個体群数理モデルと絶滅リスク評価 一カワラノギクを例に一・石濱史子（東京大学・総合文化・広域システム）

第4章 日本産稀少野生植物の遺伝的多様性・牧雅之（東北大学・理・生物）

・・・解説Box：遺伝的多様性の意味・矢原徹一（九州大学・理・生物）

第5章 照葉樹林の植物地理から森林保全を考える・服部保（姫路工業大学自然・環境科学研究所／神戸県立人と自然の博物館）

・・・解説Box：生物の分布域は何が決めたのか？歴史と環境・萩原信介（国立科学博物館・自然教育園）

第6章 未定：水生植物の遺伝的変異と保全ーヒメコウホネ、アカウキクサを例に？・鈴木武（神戸県立人と自然の博物館・生物資源）

・・・解説Box：水生植物の保全を考える・角野康郎（神戸大学・理・生物）

第7章 生活域の植物の保全手法としての復元ーアサザプロジェクトを例に・鷺谷いづみ（筑波大学・生物科学系）

第8章 仮題：種の保全・自生地復元と種生物学・河野昭一（京都大学名誉教授）

総合討論：何を保全するのか？理由と対象と手法

まとめ：野生生物を救う科学的思考とは何か？・松田裕之（東京大学・海洋研・資源解析）

単行本化に伴い、和文誌の発行が遅れています。2000年度中には正常化する予定です。皆様のご理解・ご支援をよろしくお願いいたします。

## 名簿更新作業に 御協力ください

本年度の種生物学会役員選挙、およびPSBの本格的な国際化にともない、会員名簿の更新、英文化作業を行っております。前回のニューズレター19号でも御協力をお願いいたしました。御返信いただけていない方がおられます。

まだお済みでない方は、

**4月30日までに、**

このニューズレターの最終ページ（この裏）をコピーし、必要事項を下記の連絡先まで御連絡ください。

電子メールを使える方は、できるだけ電子メールで御返信いただければ幸いです。その場合、形式は問いませんが、記入事項を本文とし、添付書類でお送りいただくことは避けていただきますようお願いいたします。

連絡先：（4月30日まで）

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部 生物学教室生態科学講座

石井 いずみ 宛

E-mail: iishiscb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

FAX: 092-642-2645 TEL: 092-642-2624

※ 今年5月以降に変更があった場合や不明な点などは会計幹事まで御連絡ください。

〒599-8531 堺市学園町1-1

大阪府立大学 総合科学部

西野 貴子

E-mail: nishino@el.cias.osakafu-u.ac.jp

FAX: 0722-54-9932 TEL: 0722-54-9754



# FAX (郵送) 用紙

1999年9月のニュースレターでも、ご協力をお願いしました。  
まだ返信されていない方のみ、4月30日までに、ご連絡ください。

FAX 092-642-2645  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
九州大学理学部生態学研究室  
石井いずみ様  
E-mail iishiscb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

## 名簿更新, 英文情報

氏名 : \_\_\_\_\_  
NAME (大文字) : \_\_\_\_\_  
所属 : \_\_\_\_\_  
INSTITUTION : \_\_\_\_\_  
所属先住所 : \_\_\_\_\_  
ADDRESS : \_\_\_\_\_  
郵便番号 : (〒      -      ) \_\_\_\_\_  
電話番号 : \_\_\_\_\_  
FAX 番号 : \_\_\_\_\_  
e-mail アドレス : \_\_\_\_\_  
専門分野 : \_\_\_\_\_

会誌, ニュースレターなどの送付先として, 所属先以外をご希望の場合には,  
以下もご記入ください。

会誌送付先 : (〒      -      ) \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_



編集兼発行人 : 501-1193 岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学農学部多様性生物学 川窪伸光  
印刷所 : 岐阜市大黒町 2-2 岐阜プリント  
発行 : 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学理学部生態学教室 種生物学会